

## 48 みなみなかばる 南中原第1遺跡

### (1) 遺跡の立地

小丸川を北東に望む段丘裾部に立地する。標高は36～50mを測る。遺跡の北側には野首第2遺跡が所在する。北東側に湧水点が認められる。

### (2) 調査の概要

本遺跡においては、K-Ah (IV層) 下層のMB0 (V層) が主な調査対象層となった。なお、斜面下にあたる調査区東部ではMB0の下位は礫層となる。

#### ①後期旧石器時代

調査区南西部のMB3 (VII層) 下より剥片が1点出土したのみである。調査区全体にトレンチを設定し精査に努めたが、剥片1点以外に遺構や遺物は認められなかった。

#### ②縄文時代早期

MB0層中からは集石遺構が11基検出されており、その下位のML1 (VIa層) 上部で集石遺構が3基、土坑が10基検出された。集石遺構の分布は、調査区南部に集中している。

これら集石遺構のうち3基は、配石を有するもので、2基の配石は石皿を転用したと思われる。また、埋土中に炭化物が認められたのは1基のみであった。

遺物は、薄手無文土器、貝殻条痕文土器や石鏃、石核、剥片等の石器が挙げられる。

#### ③縄文時代後・晩期

遺構では晩期の土坑が5基検出された。SC15の埋土からは黒川式の浅鉢が出土した。埋土中に炭化物を含む土坑も2基存在する。また、調査区北部のV層内からは磨消縄文土器など後・晩期の土器や打製石斧や磨製石斧が出土した。

#### ④その他

MB0中より溝状遺構が1条と道路状遺構と思われる硬化面が1条検出されたが、共伴する遺物の状態が良くないため詳細な時期は不明である。

また、防空壕や薬瓶など近現代の様子を伺える痕跡も残っていた。

### (3) 小 結

本遺跡の後期旧石器時代では、人間活動の希薄さが読み取れるが、縄文時代早期になると一転して活発な活動が展開される。特に集石遺構が調査区南部のみに分布することは遺跡の性格や遺跡空間を分析する上で一つの手がかりとなろう。

他方、縄文時代後・晩期に属する遺構・遺物の存在は、隣接する縄文時代後期の集落跡である野首第2遺跡と時期的・性格的に対比的な関係を示唆している。

(文責 堀口悟史)



第28図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

### （1）遺跡の立地

本遺跡は、鬼付女川右岸の標高約 80mを測る三財原段丘面上に立地する。北側は平成 14 年度に確認調査を行った一丁田遺跡と近接し、谷を挟んだ南側の台地上には永牟田第 1・2 遺跡が立地する。今年度調査を行った C 区は北東方向に緩やかに傾斜し、調査区北端部においてはさらに傾斜が急になる。また、調査区より約 30m北に湧水点が点在する。

### （2）調査の概要

平成 14 年度に行われた一次調査の際に、本調査区より町道を挟んだ南側の A・B 区を調査しており、今年度の調査区は平成 16 年度からの継続調査である。調査区中央の東西方向に一ツ瀬川パイプラインが埋設されており、それを境とし北側を C 区、南側を D 区と設定した。平成 16 年度中に C 区の MB0～MB1 及び D 区の調査をほぼ終了し、今年度は C 区の AT 下位の調査を主として行った。

### ①後期旧石器時代

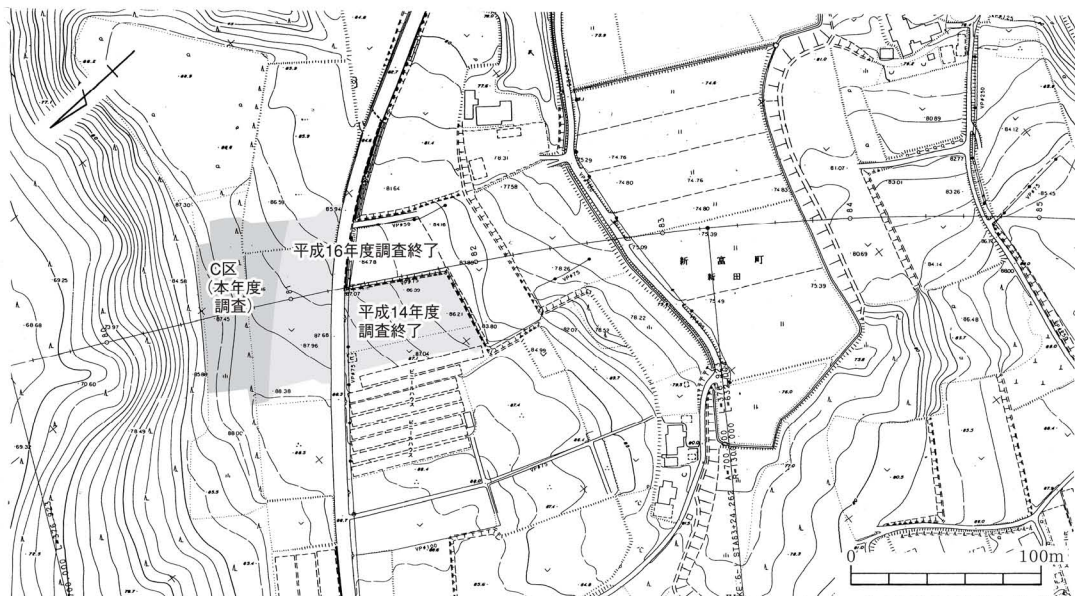
MB2（IX層）・MB3（IX層）よりナイフ形石器・スクレイパー・礫器・磨石・敲石・台石が出土した他、礫が調査区全体に散在した状態で出土した。礫は円礫が多く破碎しているものは少ない。また、規模は小さいが石器製作ブロックも数箇所確認された。

### ②縄文時代早期

調査区北東端 MB1 上面にて陥し穴状遺構を検出した。平面は、ほぼ直径約 1m の円形であり検出面からの深さは約 1m である。杭痕が数箇所確認された。検出面や埋土から旧石器時代の可能性もあるが一次調査の調査結果から縄文時代早期に該当すると考えられる。

### （3）小結

MB2・MB3において礫の出土が多くみられたが、MB1のものとは比べて破碎したものが少なくなり、集中する箇所も少ない傾向が窺えた。石材もホルンフェルスの割合が多くなる。今年度の調査結果を踏まえて時期毎の変遷が追えるべく整理作業等行っていきたい。  
（文責 立神勇志）



第29図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

## 74 おこぼる 尾小原遺跡（三次）

### （1）遺跡の立地

本遺跡は、新田原段丘面から南西に張り出す尾根上に立地する。この尾根から西に派生する小尾根が三次調査対象地である。この小尾根の西端は平坦であり、西側と南側は急斜面である。

### （2）調査の概要

昨年度調査では、縄文時代早期の遺構が多数検出され、一部の遺構は調査を終えた。今年度は引き続き未調査の遺構や旧石器時代の調査を行った。

#### ①旧石器時代

Kr-Kb を含む層で剥片 2 点が出土したが、出土地点は谷に向かう斜面であり、土層の堆積状況も不安定であった。他にトレンチを 10 本設定したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。従って、今次調査区では該期の良好な包含層はないと考えられる。

#### ②縄文時代早期

遺構は昨年度分も合わせて、集石遺構 65 基、炉穴 7 基が検出された。炉穴は集石遺構検出面より下位にある Kr-Kb を含む層から検出されたが、埋土中から出土した土器は集石遺構から出土した土器と型

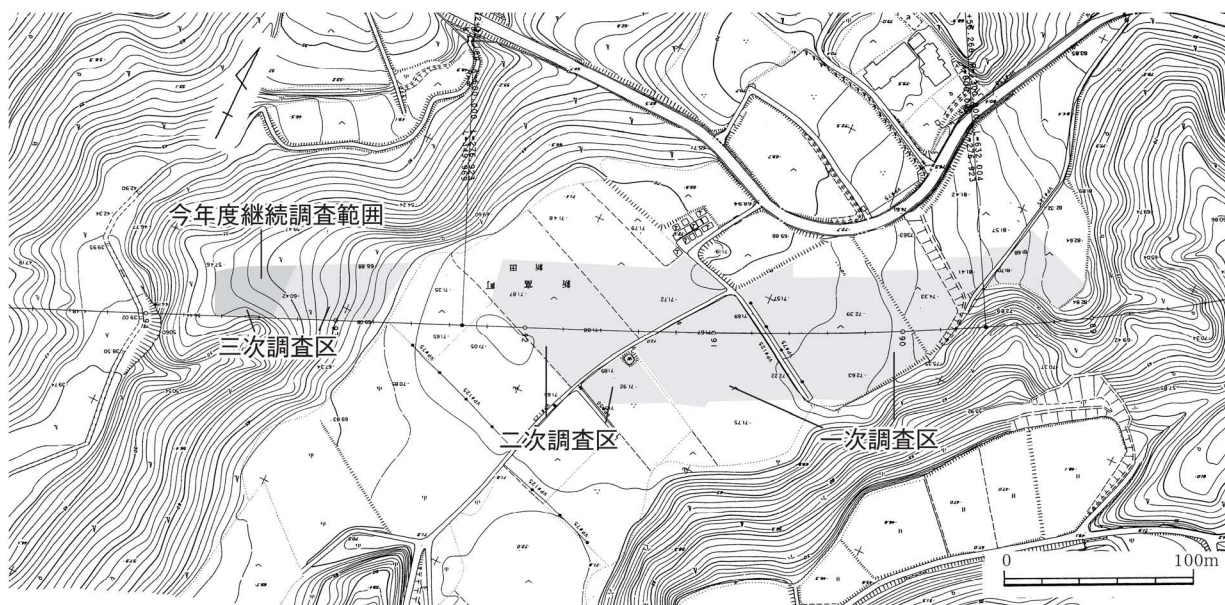
式差はなく、同時期に存在していたと考えられる。

今年度出土した遺物は、集石遺構内部や炉穴の埋土から出土したものが主体である。土器は散礫中から出土したものと型式的に大差なく、押型文土器が多く、貝殻条痕文土器・無文土器は少量である。石器は散礫中から剥片・磨製石斧が、集石遺構からは磨石・剥片など、炉穴から被熱により赤変した台石が出土した。

また、集石遺構間に尾鈴山酸性岩類や砂岩の礫が点在していたことを確認した。大きさは 0.5～0.6m の人頭大であり、扁平なものと丸みのあるものがある。これらの礫は被熱や破砕を受けた痕跡もなく、明確な使用痕跡もない。台石の可能性も考えられたため、遺物として取り上げた。

### （3）小結

今次までの調査の結果、集石遺構と炉穴は重複せずに、一定のまとまりをもって分布することや、出土した土器は型式差がほとんどないことから、遺構は同時期に存在した可能性が高い。さらに、集石遺構と炉穴、そして今回確認した集石遺構の周囲に点在していた人頭大の礫との位置関係から有機的な関係が認められるため、空間利用の在り方を検討する上で重要な資料となるであろう。（文責 岡田 諭）



第30図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

## 第IV章 まとめにかえて

### 第1節 旧石器時代

本調査・確認調査を実施した 19 遺跡中、旧石器時代の遺構・遺物の確認は 15 遺跡を数える。本年度調査が行われた範囲は新富・高鍋・川南・都農町域と広範囲にわたり、ML1～AT 下位暗色帯を中心として各遺跡とも遺物・遺構が確認されている。

#### 【遺構と遺物】

#### 1. AT 下位石器群 (ML3～AT 直下)

AT 下位では、ML3、MB2～MB3、AT 直下より遺物・遺構が確認されている。このうち ML3 では中ノ迫第3遺跡、朝倉遺跡よりホルンフェルス製の石斧が確認されている。両遺跡とも、同一層での剥片等の出土が乏しいが、他地域との比較検討を要する資料である。また、中ノ迫第2遺跡は現在、遺構・遺物は確認されていないが ML3 下位の良好な堆積が確認されている。

AT 直下では勘大寺遺跡、立野第5遺跡、朝倉遺跡においてナイフ形石器等の石器群が確認されている。同層において立野第5遺跡では3箇所の石器ブロックが確認されており、その遺物量も一定の規模で確認されている。また、朝倉遺跡では1m×1mの範囲内よりおよそ150点の黒曜石の剥片、碎片が出土している。

#### 2. AT 上位石器群 (ML2～ML1)

前ノ田村上第2遺跡ではML2とMB1とが層位的に分離できる状態で石器群が確認された。出土石器の内、ML2 出土の剥片尖頭器は大型でMB1 出土の剥片尖頭器に比べ基部の挟りが明瞭といった特徴が観察でき、剥片尖頭器の変遷において重要な資料といえる。Kr-Kb を含む層では中ノ迫第2遺跡より角錐状石器と剥片を中心とした石器ブロックが検出されており、今後の接合状況により角錐状石器の製作跡といった可能性を含む資料である。また、尾立第3遺跡では ML1 下部より瀬戸内技法系の剥片が確認されている。

ML1 上部では前ノ田村上第2遺跡、朝倉遺跡にお

いて基部加工を施し、打面を残地するようなナイフ形石器終末期とされるような石器群も確認されている。

#### 3. 細石刃石器群 (ML1～MBO)

細石刃石器群に関しては、立野第5遺跡、朝倉遺跡で10点を超える細石刃核が出土している。出土した細石刃核の形態には小形黒曜石を素材とした小型の細石刃核、流紋岩等を石材とした船野型細石刃核などが確認されており、その形態も様々である。また、県内で特徴的な畦原型細石刃核が前ノ田村上第2遺跡、立野第5遺跡から出土している。

#### 【今後の課題】

今後の課題として、第I章第3節で触れられているように、新富・高鍋町域で確認されていた火山灰の堆積が、調査地の北上につれ不明瞭となっており、このことから層位的な出土位置から単純に遺跡間対比を行うことが難しい状況となっている。

今後は、平面的な出土状況や接合資料等による石器群の検討が必要である。また、調査地が北へと移るにつれ、出土石器群の特徴、利用石材等に変化が予想される。

特に、石材に関しては県内のこれまでの調査成果から、県北では流紋岩等の白い石材、県央では頁岩・ホルンフェルス等の黒い石材が用いられる例がみられ、当時の集団の石材利用を考える上でも重要である。調査区内のみでの石器群の把握だけでなく周辺地域との関連性を検討することも今後必要となろう。

(文責 岸田裕一)

### 第2節 縄文時代

今年度は17遺跡において、縄文時代に該当する遺構・遺物が確認された。本節ではこれら縄文時代に該当する遺構・遺物の総括を時期毎に行う。

#### 1. 草創期

草創期に該当する遺構・遺物は、今年度4遺跡から検出されている。八幡第2遺跡、前ノ田村上第2遺跡では、隆帯文土器の側から集石遺構が検出されており、両者の関連を指摘できれば、集石遺構の形態変遷を研究する上で貴重な資料となるだろう。ま

た、朝草原遺跡では無文土器が、国光原遺跡では隆帯文土器がそれぞれ出土している。

## 2. 早期

縄文時代の遺物が確認されたほとんどの遺跡で、早期の遺構・遺物が得られた。

特に集石遺構は、ほとんどの遺跡で検出されている。その中でも、新富町の尾小原遺跡（三次）では65基が、川南町の尾花A遺跡では100基以上、国光原遺跡では59基が検出されている。また、都農町においては、立野第2遺跡で15基検出された以外に集石遺構が集中して検出された遺跡はなく、各遺跡とも数基に留まっている。

炉穴では、中ノ迫第3遺跡で炉穴群として4群と単独で1基、国光原遺跡で41基の炉穴が検出されている。その他、登り口第1遺跡で9基、尾小原遺跡（三次）で7基、中ノ迫第2遺跡で1基、検出されている。特に中ノ迫第3遺跡では、炉穴の1基から単独土器型式の深鉢が出土しており、炉穴の使用時期を特定できる。そして、ほぼ一個体の深鉢であることから炉穴の用途を考える上でも興味深い。また、登り口第1遺跡の炉穴は、同遺跡より集石遺構が検出されていない稀な事例であるが、現代の削平を受けた可能性もあり、慎重な考察が必要である。

遺物、特に土器では、中ノ迫第2遺跡・尾小原遺跡（三次）で、無文・貝殻条痕文・押型文が、朝倉遺跡では無文・貝殻押圧文・押型文が、尾花A遺跡では押型文・変形燃糸文・貝殻条痕文が出土している。これらの土器には集石遺構に伴うものがあり、集石遺構の時期差を考える一助となるだろう。また、朝倉遺跡から出土している、胴部に貝殻押圧文を持つ尖底土器は、宮崎県内での類例は見られず、今後の発掘成果からの位置付けが期待される。

## 3. 前期～晩期

尾花A遺跡で、前期にあたる轟B式と曾畑式の土器が出土しているが、攪乱や埋土中からの出土であり出土状況は良好とは言えない。また、近隣の遺跡でも前期の遺構・遺物は確認されていない。

後期では、南中原第1遺跡で磨消縄文土器が出土した。また市納上第2遺跡からも当該期の土器が出土しており、詳細は今後の整理作業で明らかにした

い。

晩期に該当する遺構・遺物では、南中原第1遺跡で土坑の底面より黒川式土器が出土している。

都農～西都において前期以降の遺構・遺物は早期と比べ極端に検出状況が良好でないことが窺える。

（文責 佐竹智光・堀口悟史）

## 第3節 弥生時代

本年度調査が実施された中で、該当期の遺構・遺物は6遺跡で確認された。都農町朝倉遺跡、川南町八幡第2遺跡・市納上第2遺跡・前ノ田村上第2遺跡・尾花A遺跡である。時期的には中期から終末に属し、遺構としては竪穴住居跡・周溝状遺構・土坑・ピット群がある。

### （1）中期

中期に属する遺構が検出されたのは、尾花A遺跡である。円形プランを持つ竪穴住居跡約2軒、方形プランをもつ竪穴住居跡3軒、周溝状遺構1基、土坑・ピット群が確認できた。方形プランをもつ竪穴住居跡には長方形のプランをもつもの2軒を含む。このうち1軒では、他の住居と比べて出土遺物が異なっており、床面で多くの敲石が限られた範囲内で検出できた。住居の性格として工房であることも考えられる。

今年度の調査により、この時期の遺構・遺物の存在することがわかり、集落遺跡としての時期幅を広く考える必要がでてきた。

### （2）後期～終末期

6遺跡すべての遺跡でこの時期の遺構・遺物が確認されている。八幡第2遺跡・前ノ田村上第2遺跡・尾花A遺跡では竪穴式住居跡が確認された。規模は一辺約5m前後の方形プランをもつ竪穴住居跡が多い（以下、住居の記述はこのプランの竪穴住居跡を指す）。これらの住居跡では炭化材や焼土が多く検出され、焼失したと考えられるものが多い。

八幡第2遺跡では後期に属する竪穴住居跡が9軒検出された。約半数の住居は焼失住居と考えられる。うち1軒は一辺約7mの方形プランをもち、比較的大型である。

前ノ田村上第2遺跡では竪穴住居跡が2軒検出された。いずれも焼失住居と考えられる。

尾花A遺跡では竪穴住居跡、土坑、ピット群が確認されている。また、方形プランを基調として間仕切りを有する住居が検出された。後期に属する竪穴住居跡では方形プランをもつものが多く、古墳時代にはいっても同じく方形プランをもつ。

朝倉遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の甕およそ6個体分が埋没した土坑が検出された。この遺跡では同時期の遺構が他に見つかっていない。廃棄土坑の可能性が考えられる。市納上第2遺跡では石器とともに弥生時代後期から古墳時代初頭の土器片が確認された。土器片の時期に該当する遺構は見つかっていない。

### (3) 今後の課題

以上、本年度調査された遺跡について見てきたが、前年度に引き続き同時期の住居の調査例が増加した。また、検出できた工具類については、生産痕跡として弥生時代の集落像を考える手がかりとなる。集落ごとに抽出すべき課題である。 (文責 天野玄普)

## 第4節 古墳時代

今年度の調査において古墳時代に関連する遺構・遺物の出土が見られたのは、尾花A遺跡と登り口第2遺跡のわずか2遺跡である。そのうち尾花A遺跡において、古墳時代前期を中心とした大規模な集落跡が検出されている。

### 【尾花A遺跡】

尾花A遺跡一次調査区では、古墳時代前期の竪穴住居跡が約100軒検出され、切り合い関係にある住居跡が多く確認されている。

一方、同じ尾花A遺跡の二次調査区では古墳時代前期の住居跡が約30軒検出されているが、切り合い関係にある住居は多くはない。こうした住居の粗密は、集落内の空間利用の違いを示すものと考えられるが、いずれにしても当遺跡における集住度の高さが窺える。

石器類の種類も豊富で、さらに工具などの鉄器類も出土していることから、一時的なキャンプサイトではなく、やはり恒常性のある拠点的な集落として機能していたと考える必要がある。

なお、尾花A遺跡の性格を考える際に、近隣に所在する川南古墳群との関連を考慮しなければならない。同古墳群は、古墳時代前期から連綿と続く古墳群で、前方後円墳が多く営まれることが特徴である。古墳時代前期を主体とする尾花A遺跡が、この古墳群の造墓集団の集落であった可能性はあるが、谷を隔てた場所に位置している点も考慮する必要がある。

また、距離は少し離れるものの、小丸川下流北岸に位置する持田古墳群との関連も考えなければならない。

今後集落と古墳の立地関係に基づいて、小丸川北岸に広がる台地上での空間利用のあり方を詳細に検討する必要があるだろう。

### 【登り口第2遺跡】

登り口第2遺跡において竪穴住居跡が1軒検出されている。古墳時代中期に比定され、表土中から細片化した土師器片が多量に出土したことから、該期の集落が存在した可能性が考えられる。

集住度の高さは見られないが、集落の縁辺部にあたる可能性もあるため、規模や性格について断言するのは難しい。

### 【今後の課題】

これまでに、東九州自動車道関連の調査では、先述の尾花A遺跡をはじめとして、宮ノ東遺跡などで古墳時代の大規模な集落跡が検出されている。台地の縁辺部に所在するこれらの大規模集落は、河川を利用した移動・流通の拠点として考える必要がある。

宮崎県下には、西都原古墳群や祇園原古墳群をはじめとして、大規模な古墳群が各地に点在しており、そのあり方は全国的にも極めて特異な様相を呈している。こうした古墳群の造墓集団の実像、すなわち当時の集落の様相については、今後明らかとなっていくだろう。

その際に、各遺跡の詳細な分析に基づいた遺跡内の空間利用だけでなく、周辺地形を考慮した古墳時代の遺跡立地論を構築していくことが重要である。

とりわけ、宮崎平野北部は発達した台地と河川によって複雑な地形を呈しており、従来の2次元的な分布論ではなく、各段丘面などを考慮した3次元的な視野での分布論が必要となってくるだろう。

(文責 淵ノ上隆介)

## 第5節 古代以降

川南町尾花A遺跡・国光原遺跡で古代～中世に属すると判断できる遺構が検出された。

尾花A遺跡では一次調査区において溝状遺構6条、石組遺構2基を検出したが、一部の溝状遺構は古代に遡る可能性がある。また溝状遺構の埋土中に硬化層が存在し、道路としての機能を想定できる例もあるとされる。二次調査区では掘立柱建物跡2棟、溝状遺構4条、土坑1基などを確認している。

これらの遺構や調査区内からは土師器、中国産磁器（青磁・白磁）、東播系須恵器などが出土しているほか、土錘や炉壁片・鉄滓など生業に関わる遺物も見られ注目される。

国光原遺跡では平成16年度から継続しているB区の調査において10条の溝状遺構が検出された。全ての遺構について帰属時期を明確にはしえないが、ヘラ切りの土師器皿や東播系須恵器鉢が出土した溝については中世に属する可能性がある。

これら二遺跡に共通する特徴として、口禿の白磁皿（大宰府分類皿IX類）や片切彫の蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗（大宰府分類碗II（旧I-5）類）、東播系須恵器鉢などが目立つ一方で、備前焼播鉢や中国産青花をほとんど含まないという点があげられる。すなわち大きく見ても14世紀代までに盛期を終えてしまう集落であると考えられる。

こうした特徴は平成15～16年度に調査を実施した川南町湯牟田遺跡二次調査・赤坂遺跡と共通するものであり、赤坂遺跡からは鉄滓も出土している。国光原遺跡B区は湯牟田遺跡二次調査区の北隣斜面に当たり、同じ集落の一部である可能性が高い。

これに対して、平成15年度以前に調査された県道都農・綾線沿いの川南町前ノ田村上第1遺跡・銀座第1遺跡では上述したような遺物の他にも、雷文帯や粗略な蓮弁文・線描の細蓮弁文を有する青磁碗及び備前焼播鉢を多量に出土しており、著しい対照をなすものである。

こうした集落の存続期間に見える二つの様相は、中世社会の交通路や流通網の消長という問題とも密接に関わっていると考えられ、各遺跡の状況を細か

く分析し、それらの成果を総合することで問題の核心に迫りうると期待できるものである。平成13～14年度に実施した湯牟田遺跡一次調査で検出された大規模な道路状遺構も重要な鍵となろう。

一方、課題が残る遺構としては石組遺構があげられる。平成14年度に一ツ瀬川河川改良工事に伴って調査された新富町竹淵C遺跡の報告書において、県内21例が集成されていたが、平成15～16年度調査の宮ノ東遺跡や今年度における尾花A遺跡での例が追加され、増加の一途をたどっている。良好な遺物出土事例に乏しく帰属時期の推定が困難ながらも、中世集落の中で検出されたり、埋土中に中世遺物を含む例が目立つことから概ね当該期の遺構とされている。石の間に粘土で目張りを行ったり、内面に被熱の痕跡が見られるなど、共通する特徴を有するものも多いが、用途の特定には至っていない。

同様な石組遺構は朝倉遺跡でも検出されたが、遺構周辺ではVII層以上が削平されている影響もあってか古代以降の遺物・遺構が他に無く、時期比定は困難である。また底面に石を貼らないなど構造に関しても他の石組遺構との相違点があり、その性格付けには慎重にならざるを得ない。

登り口第2遺跡でも中世の土師器杯や皿、備前焼播鉢が出土し、近世後半の陶磁器が表採されている。  
(文責 堀田孝博)

### 【参考文献】

- 太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『竹淵C遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『湯牟田遺跡（一次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第107集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書V』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『前ノ田村上第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第116集

## 第6節 フローテーション作業と成果

### (1) 作業目標と経過

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査において、平成 15 年度から調査の一環としてフローテーション作業を継続している。

これまでのおもな成果として、乾燥した遺跡から炭化種子が検出できること、炭化種子の多くは人里に生える雑草系で穀物検出例はいまだ少ないこと、弥生後期～古墳初頭の堅穴住居跡（床面各所）・周溝状遺構（溝埋土）からドングリ類以外にもコメ・アワ等の栽培植物が出土することが挙げられる。

今年度はこれまでの成果・課題を受け、次の①～③を作業目標とした。

- ① 古墳時代～平安時代の堅穴住居跡にともなう火処（竈・埋甕等）埋土を水洗し、食糧残滓・燃料の復元を目指す。
- ② 弥生時代・中世墓の床付近の埋土を水洗し、微細な副葬品・供献物発見を目指す。
- ③ 前年度に続き、弥生時代の堅穴住居跡の埋土を水洗し、サンプリング方法等の検討材料とする。

今年度は表 12 に挙げた 8 遺跡で、試料 452 点・総計 1,600kg 近い土の水洗を実施した。また 3 遺跡で肉眼・実体顕微鏡での選別作業を実施した。

特筆される成果としては、川南町大内原遺跡の弥生中期後半の土坑からイネ（炭化米）がまとまって検出された例が挙げられる。

なお、成果の一部については、平成 17 年 9 月長崎県壱岐で開催された第 2 回九州古代種子研究会で公開している（谷口・藤木 2005）。

### (2) 方法の検討

#### ①試料の土質の相違と作業の難易

今年度までの作業をとおして、土質の相違によってとくに水洗段階における作業の効率に大きな差が

生じるとわかった。

もっとも水洗容易なのはクロボクで、乾燥すると風に舞うほどサラサラであるため、ゴミの除去・炭の回収も容易である。一方、ローム質の粘性土・カマド構築粘土等（白色粘土等）は、乾燥段階でよくこなれていることが肝要である。仮にこなれておらず塊状であると、水中で固結してしまいゴミの除去・炭の回収が困難である。また、表土直下の試料には現生植物が多く混じり、選別に支障をきたす。

今後、サンプリング対象を選択する時、考慮すべき点である。

#### ②種実等の圧痕ある土器の抽出

土器には、その表面に種実等の圧痕が残される例が広く知られている。今年度進めた整理作業の中で、フローテーション成果を補強していく意味でもこれら圧痕ある資料の抽出に注意した。

作業は、とくに水洗・注記・接合の段階とし、おもに赤坂・八幡第 2・国光原遺跡等の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が対象となった。

この結果、整理途上ではあるものの、現状として表 13 に挙げた 23 例の圧痕例を確認できた（写真 21-1～8）。

肉眼・実体顕微鏡での観察から、圧痕にはイネが多くみられ、このほか種の不明なものも少量みられた。アワ・ヒエといったミリレベルの種子圧痕は現在のところ見いだせていない。

今後、種の同定精度をより高めることや微細種実等の検出が課題である。

### (3) 今後の展望

今後の展望として、まずフローテーション作業のさらなる効率化が求められる。一方、土器に残された圧痕からの後押しも、より簡便な方法として推進されるべきであろう。

（文責 興沼慶一・藤木 聡）

#### 【引用文献】

谷口武範・藤木 聡 2005 「宮崎県内出土の植物遺存体」『第 2 回九州古代種子研究会』発表要旨集



表12 フローテーション対象試料の一覧(平成17年12月現在)

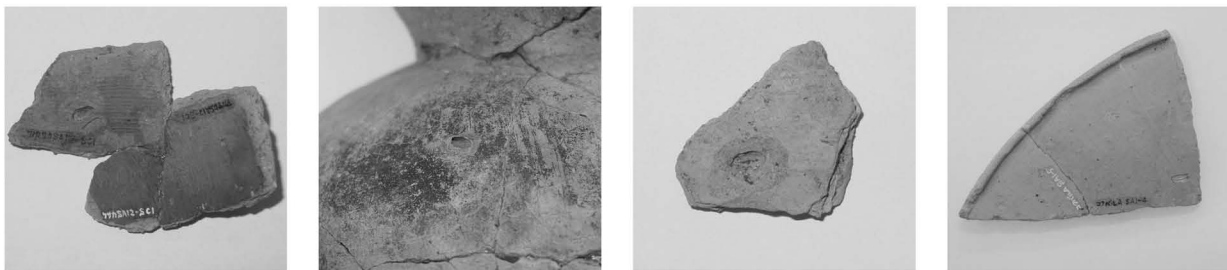
遺 跡	試料数(点)	コンテナ数(点)	土重量 (kg)	主な対象遺構	土 質
赤坂	24	136	212.205	弥生後期 竪穴住居床・周溝墓主体部・周溝状遺構埋土	クロボク
大内原	17	24	48.820	弥生中～後期 竪穴住居床・土坑床 / 中世 墓床面	クロボク
宮ノ東	299	299	928.058	弥生～古墳～奈良平安 竪穴住居火処・土坑	粘性土
野首第1	8	56	264.985	縄文早期 集石 / 近世 土坑	クロボクほか
野首第2	74	74	64.110	縄文早期 集石 / 古墳中期 竪穴住居床面	クロボクほか
西ノ別府	8	12	12.280	古墳前期 竪穴住居床面・鏡周辺 等	クロボクほか
永牟田2	1	1	5.430	旧石器 (MB3) 礫群周辺	粘性土
中ノ迫第3	21	26	64.890	縄文早期 炉穴	粘性土
計	452	628	1600.778		

※ 試料数は試料の性格ごとにカウントした。したがって同一試料がコンテナ複数箱にわたった場合も一箱の場合も試料数は1となる。

表13 種実圧痕のある土器の一覧(平成17年12月現在)

写真	遺 跡	整理対象時期	圧痕の時期	出土位置	器形	部位	種別	数(点)	備考
1	赤坂	弥生後期～古墳初頭	弥生後期	SA15上	甕	胴部外面	イネ	1	
			弥生後期	SA12-SC1	鉢	口縁内面	イネか	1	
			弥生後期	SA10-5C	浅鉢か高坏	胴部あるいは坏部外面	不明	1	土器胎土の隙間か。
			弥生後期	SA10-29b	甕	胴部外面	不明	1	堅果類の外皮か。
			弥生後期後半か	SA12C中	甕	底部上内面	不明	1	種子か。
			弥生後期後半か	SA12C中	甕	底部外面	不明	1	種子か。
2	赤坂	弥生後期～古墳初頭	弥生終末～古墳初頭	SA6-10	壺	頸部外面	イネ	1	
			弥生終末～古墳初頭	SA6-8	壺	胴部外面	イネか	1	
3	八幡第2	弥生終末～古墳初頭	弥生後期	A SA7上	壺	胴部外面	イネ	1	
4	国光原	弥生終末～古墳初頭	弥生後期後半～終末	A SA1-4・5	器台	裾端部内面	イネ	1	
5	尾花A(一次)	弥生～中世	弥生中期前半～中期末か		甕	口縁外面	イネ	1	
6	野首第2	縄文後期	縄文後期中葉	縄文後期中葉	深鉢	胴部外面	ドングリ類	1	
7	宮ノ東	縄文～近代	縄文後期・晩期か	E9B II	深鉢	胴部外面	不明	1	種子か。
			5C後半	F3B IIb	甕	底部付近外面	イネ	1	
			5C後半～6C	F5A II・III	壺	胴部外面	イネ	1	
			6C	D13D III	甕	胴部内面	不明	1	
			6C中～後半	F5A IIb	甕	底部付近外面	不明	1	種子か。
			7C中～後半	F5A IIb	坏	口縁外面	イネ	2	
			7C中～後半	F3B IIb	坏	口縁内面	イネか	3	
			8C後半～9C前半	F5A IIb	甕	胴部外面	不明	1	種子か。
8	宮ノ東	縄文～近代	9C～10Cか	F5A IIb	坏	胴部内面	不明	1	種子か。
			9C後半～10C前半か	D13D III	坏	底部内面	イネ	1	
8	宮ノ東	縄文～近代	9C後半～10C前半か	F3A IIb	坏	底部外面	不明	1	種子か。

※ 土器底部外面に残る数台の圧痕や土器胎土に含まれる有機質の圧痕(混和剤)のように、土器製作に関連する圧痕は省いた。

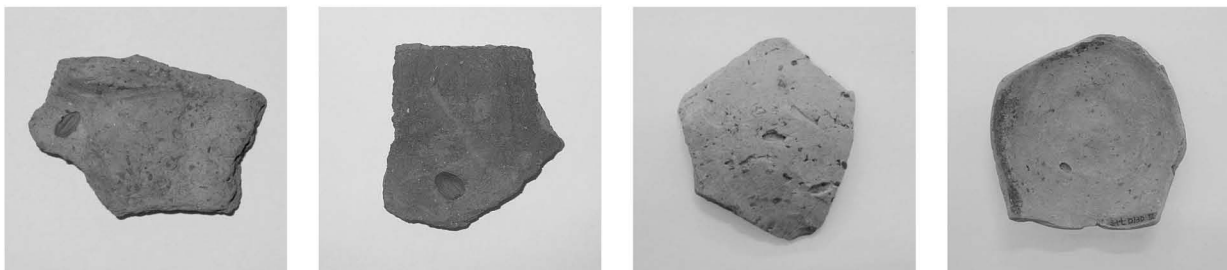


1 赤坂遺跡

2 赤坂遺跡

3 八幡第2遺跡

4 国光原遺跡



5 尾花A遺跡

6 野首第2遺跡

7 宮ノ東遺跡

8 宮ノ東遺跡

写真21 種実等の圧痕のある土器

表14 縄文時代早期～後期旧石器時代相当層における各遺跡の出土状況(平成17年度調査分)

新富・高鍋・川南町域基本層序		新富町		高鍋町	川南町						
No.	略称	層名	尾小原(3次)	勤大寺(2次)	南中原1	尾花A	国光原	前ノ田村上第2	中ノ迫第3	中ノ迫第2	市納上第2
5	K-Ah	鬼界アカホヤ									
6	MB0	黒褐色ローム		P,Ar,Gr, <i>SI</i>				P, <i>SI</i>			
7	ML1	暗褐色ローム	Ar, <i>He,SI</i>		P,Ax,Ar, <i>SI</i>	P,Ar,Gr,Ax, An,Sc, <i>SI</i>	P,Gr,An,PT,Ar, <i>He,SI</i>		P,Ar,An,Gr,Ha, <i>SI,He</i>	P,Ar,Ax,Sc,MB, <i>MC,Ha,He,SI</i>	P,Ar,Gr,Ha, <i>SI</i>
8	Sz-S	桜島薩摩						Kn,MB,MC, <i>PC</i>			
9	ML1	暗褐色ローム					Kn,MC,MB				
10	Kr-Kb	小林軽石を含む層	Fl	Kn,Ka,FP,Sc, <i>PC</i>			Fl,Co	Kn,FP,Ha, <i>PC</i>	Kn, <i>PC</i>	Kn,Ka,MB,Ha, <i>PC</i>	Kn,Ka,FP,Sc, <i>Pc</i>
11	MB1	暗褐色ローム		Kn,Ka,FP,G r,Ha,Ax,An, <i>PC</i>							
12	ML2	褐色ローム						Kn,Ka,FP, <i>PC</i>			
13	AT	始良Tn									
14	MB2	暗褐色ローム					Ha,Ax				
15	A-Fm	始良深港		Kn,Sc,PT,Gr							
16	A-Ot	始良大塚		,Ha,An			Tr,PT				Fl
17	MB3	暗褐色ローム			Fl					Fl	
18	ML3	褐色ローム							Ax		
19	Kr-Aw	アワオコシ									
20	ML4	明褐色ローム									
21	Kr-Iw	イワオコシ									
22		明黄褐色ローム									
23		キンキラローム									
24	A-Iw	始良岩戸									
25	Aso-4	阿蘇4									


凡 例

- ・P=土器、Ar=石鏃、MB=細石刃、MC=細石刃核、Kn=ナイフ形石器、Ka=角錐状石器、FP=剥片尖頭器、Tr=台形石器、Gr=磨石、Ha=敲石、Ax=石斧  
Sc=スクレイパー、An=台石、Fl=剥片、Co=石核、PT=礫塊石器、*SI*=集石遺構、*He*=炉穴、*PC*=礫群 ※Fl, Coに関しては器種の存在しない包含層のみ記入
- ・散礫は記入していない
- ・は礫層

表15 縄文時代早期～後期旧石器時代相当層における各遺跡の状況(平成17年度調査分)

川南・都農町域基本層序			川南町				都農町			
No.	略称	層名	登り口第1	登り口第2	八幡第2	立野第2	立野第5	尾立第3	朝草原	朝倉
5	K-Ah	鬼界アカホヤ		P,Fl						
6	MB0	黒褐色ローム	P,He				Ar		P,Ar,SI	P,Ar,MB,MC
7	ML1	暗褐色ローム	P,Ar,Sc,He,Ax		P,SI	P,Ar,Gr,Ha,SI			P,MB,MC	P,Ar,MB,MC,Kn,SI
8	Sz-S	桜島薩摩					MB,MC,Kn,Ka,			
9	ML1	暗褐色ローム	FP,MB,Kn			Fl,Co,PC	FP,Tr,Gr,Sc,SI,PC	Ar,Kn,Ka,FP,MC,PC,SI	Fl	Kn,Ka,FP,Tr,Sc,PC
10	Kr-Kb	小林軽石を含む層								
11	MB1	暗褐色ローム								Fl,PC
12	ML2	褐色ローム								
13	AT	始良Tn								
14	MB2	暗褐色ローム				Fl	Kn,PC			Kn,PC
15	A-Fm	始良深港								
16	A-Ot	始良大塚	Fl,Co							
17	MB3	暗褐色ローム								
18	ML3	褐色ローム							PC	Ax,PC
19	Kr-Aw	アワオコシ								
20	ML4	明褐色ローム								
21	Kr-Iw	イワオコシ								
22		明黄褐色ローム								
23		キンキラローム								
24	A-Iw	始良岩戸								
25	Aso-4	阿蘇4								

凡例

- ・P=土器、Ar=石鏃、MB=細石刃、MC=細石刃核、Kn=ナイフ形石器、Ka=角錐状石器、FP=剥片尖頭器、Tr=台形石器、Gr=磨石、Ha=敲石、Ax=石斧  
Sc=スクレイパー、An=台石、Fl=剥片、Co=石核、PT=礫塊石器、SI=集石遺構、He=炉穴、PC=礫群 ※Fl, Coに関しては器種の存在しない包含層のみ記入
- ・散礫は記入していない
- ・は礫層

# 報告書抄録

ふりがな	ひがしきゅうしゅうじどうしゃどう（つの～さいとかん）						
書名	東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書						
副書名							
巻次	VI						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第131集						
執筆・編集担当者名	宮園淳一	高山富雄	長津宗重	小川太志	竹田享志	安藤正純	小山 博
	安藤利光	白地 浩	松林豊樹	興梶慶一	堀田孝博	藤木 聡	今塩屋毅行
	嶋田史子	立神勇志	岡田 諭	渡辺美幸	大野義人	森本征明	井上美奈子
	天野玄普	福田 聡	日高優子	岸田裕一	佐竹智光	堀口悟史	瀧ノ上隆介
	金丸琴路						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171						
発行年月日	2006年3月20日						

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第131集

東九州自動車道（都農～西都間）関連  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI

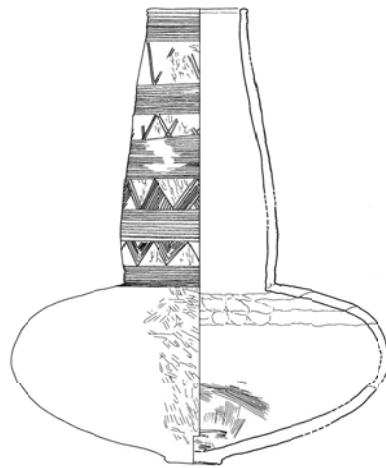
2006年3月20日

編集  
発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地  
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-25-7286

印刷 株式会社 長崎印刷  
〒886-4413 宮崎県西諸県郡高原町大字後川内 18-2  
TEL 0984-42-1069 FAX 0984-42-1330

---

---



弥生土器（赤坂遺跡）